



Title	＜翻訳＞ボドル・アーダーム「夜の駅」
Author(s)	築瀬, さやか
Citation	ハンガリー研究. 2021, 1, p. 305-316
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81539
rights	
Note	ISSN: 2436-1364 (print), 2436-4932 (online)

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

夜の駅

ボドル・アーダーム

1977 年

凍てつくような冬の夜、ヴィショー駅のがらんとしたプラットフォームにときおり犬がやってくる。いそいそとホームを渡り、何をするのか、荷物を載せて寒さでしむ貨車の後ろへもぐりこむ。しばらくして戻てくると、彼らは小さな転轍機の横で少しばかり体を温め、土手を降りてプラムの木の下に続く、いつもの小道に帰っていく。この辺りをよく訪れる者にとってはおなじみの犬たち、あらわれるのはいつも同じ犬なのだ。

線路に降り積もった雪はあっという間にすすで覆われ、はるかかなたにかすむ山並みと同じ色になっていく。雪というのはすすけた色になっても十分に冷気を放つもの。駅員室の窓には温度計がかかっているが、すでに外に出ている駅員にとっては、わざわざ確認する必要などないものだった。

スィゲト行きの列車が到着する 1 時間ほど前になると、ホームはにわかになであふれる。毛皮の帽子をかぶり顔にシワを寄せ、男たちがやってくる。肩に背負った袋やリュックサックから斧の柄をのぞかせて。大きな声であいさつを交わす彼らの横で、スカーフをかぶった女たちが足踏みをし、かじかむ手をコートに引っ込め、ぼそぼそと話し込んでいる。皆、思うことは同じとみえて、申し合わせたかのように一斉に念押しの言葉を喋り出す。「いいかい……するんだよ」「くれぐれも……しないようにね」。別れを告げる白い息があたりに立ち込め、服からのぞいた胸毛に霜をつける。旅のお供にともらった酒に口をつけ、パンをほおぼり、男たちはそそくさと列車に乗り込んでいく。彼らが向かうのはどこか遠くの森、仕事にありつける場所だ。まるで何かの儀式が終わったかのように、女たちは暗い列をなして駅を離れ、柵越しにひらりひらりとはた

めいていた黒いスカーフも明かりのない村へと消えていく。踏み固められる雪の音もやがて途絶え、静寂のなか列車の汽笛が響く。

黄色い明かりが灯った立ち飲み屋。白い上着をはおった男がカウンターの中から入口に向かってあくびをし、いま何時かと時計に目をやっている。カウンターの上にはオレンジが 1 皿のっており、その値札には「りんご 1 つ 4 レイ」とある。りんごをおくれと注文するとオレンジが出てくるのだ。この飲み屋は夜の 10 時半に開店し、12 時半に閉店、それから 2 時 15 分にまた開いて、明け方の 5 時半に閉まる。乗客のための店だから、こういった具合に列車が出れば閉店する。

思うに、あの温度計はもうなくなっているだろうし、飲み屋の営業時間も変わっていることだろう。犬たちは相変わらずで、夜になると線路に積もった雪のようなすすけた体であらわれて、あっという間に人気のなくなったプラットフォームを嗅ぎまわり、残された足跡に温もりを探している。

しかしこの駅も、昼の、とりわけ夏ともなればまったく異なる姿を見せる。

翻訳：築瀬さやか

Bodor, Ádám (1977) Állomás, éjszaka. *Utunk*. 32.5: 4.

(https://reader.dia.hu/document/Bodor_Adam-Az_Utunkban_megjelent_irasok-1527)

夜の駅

ボドル・アーダーム

1978 年

冬の凍てつくような夜のことであった。ヴィショー駅に 1 匹、そして 1 匹と、ときおり犬がやってきて、ホームをぬけ、鈍く光る線路の上をいそいそと渡っていった。何をするのか、荷物を載せて寒さできしむ貨車の後ろへもぐりこむ。レオルディナの方から帰ってきた犬たちは、油でベタつく小さな転轍機の車輪の横で少しばかり体を温める。それから土手をくだり、葉を落としたプラムの木々の根元に続くいつもの小道へと戻るのだ。この辺りをよく訪れる者にとってはなじみの犬たち。やってくるのはいつも同じ犬だった。

線路に降り積もった雪はまたたく間にすすで覆われ、はるか彼方の薄暗がりにはぼんやりと連なる山々と同じ色になった。すすけた色になっても、雪というのはしっかりと冷気を放つ。駅員室の窓には温度計がかかっていたが、どのみち外で仕事をしなければならない駅員が、わざわざそれを見て寒さを確認することなどなかった。

スイゲト行きの列車が到着する 1 時間ほど前になると、ホームは途端に人であふれかえった。毛皮の帽子をかぶり顔にシワのある男や青年が、袋やリュックサックを背負ってやってくる。彼らの袋からは斧の柄が飛び出している。夜だというのに大きな声で挨拶を交わす。その横でスカarf を被った女たちが足踏みをし、コート袖にかじかむ手を引っ込めてぼそぼそと話し込んでいる。別れの言葉から白い息がもうもうと立ち込め、服からのぞいた胸毛に霜をつける。男たちは旅のお供にと渡された酒に口をつけ、パンをかじり、列車が到着するとそそくさとそれに乗り込んでいった。彼らの向かう先はどこか遠くの森だった。女たちはまるで何かの儀式が終わったかのように暗い列をなして去っていく。スカarf が柵の上をひらりひらりとはためいて、あかりのない村の中へと消

えていく。彼女たちが踏み固める雪の音がかすみ、駅に静けさが戻ると、積荷を載せた貨車がきしみ、その下にいたすすけた犬たちもいつのまにかいなくなっていた。

黄色のあかりが灯った立ち飲み屋。カウンターの奥で白い上着を着た店員があくびをしていた。あくびの先の入口横のテーブルに男が1人立っている。店員は時計に目をやった。

カウンターにはオレンジが1皿盛られており、「りんご 1つ4レイ」の値札がついている。りんごを1つと注文するとオレンジが出てくるのだった。この飲み屋は夜の10時半に開店し、12時半に閉店、その後は2時15分にまた開店し、明け方の4時半に閉店する。そのあとも店はこういった具合に開いては閉まるを繰り返していた。乗客のための店なのだ。だから列車が出れば閉店する。

列車は少し前に出発したところだった。入口横のテーブルの男は頭に毛皮の帽子をかぶり、足元に置いた真新しい緑色のリュックサックからは彫られたばかりの斧の柄がのぞいていた。

「チェルヴェンスキ、聞いてもいいか？」と店員が声をかけた。

「構わないよ、ヴァスィ」とチェルヴェンスキは答えた。

「チェルヴェンスキ、お前、わざと列車に乗り遅れたんだろう？」

「ああ。その通りだ」とチェルヴェンスキが言った。

「もうやめるのか？」

「ああ、やめる」

店員は棚にあった酒の瓶を新聞紙に包むと、カウンターを回ってチェルヴェンスキに手渡した。

「でもいい稼ぎだったんだろう？」

「そうだな。でも潮時だったのさ」

「これからどうするんだ？」

「家に帰って寝るさ」とチェルヴェンスキが言った。

「そうか」と店員が返した。

彼は家へと帰っていった。それは9キロも離れたところにあったが、このあたりでは大した距離ではない。ホームを横切り貨車の下をくぐっ

て、冷たい石に覆われた土手をよろよろとおりていく。そのうち闇夜にも目が慣れた。彼の脇を犬たちがすり抜けて、レオルディナの方から戻ってきたばかりなのか、小さな転轍機の油まみれの車輪の脇に潜っていた。線路に積もった雪のようにすすけた色をしている。時折立ち止まっては匂いを嗅いで、そこかしこに残された足跡が放つわずかな温もりを探していた。

翻訳：築瀬さやか

Bodor, Ádám (1978) Állomás, éjszaka. In: Bodor Ádám. *Megérkezés északra*. Bukarest: Kriterion. (https://reader.dia.hu/document/Bodor_Adam-Megerkezes_eszakra-848)

ボドル・アーダーム作「夜の駅」について

築瀬さやか

1. はじめに

本稿では、トランシルヴァニア出身のハンガリー人作家であるボドル・アーダームの短編小説、「夜の駅」を紹介する。本作は 1977 年の作品（以下、初版）であるが、その後の 1978 年にボドル自身の手によって加筆・修正が加えられている（以下、修正版）。これら 2 つの版は、舞台や登場人物など、作品を構成するものは基本的に共通しているが、物語の後半には大きな違いが見られる。本稿では、作家自身の手によって改稿された、この興味深い「夜の駅」の 2 つの版を比較し、修正部分からうかがうことのできるボドルの世界観について考察する。

2. ボドル・アーダームについて

ボドル・アーダームはトランシルヴァニア出身のハンガリー人作家である。ハンガリーが第一次世界大戦に敗戦し、1920 年のトリアノン条約でトランシルヴァニアをルーマニアに割譲してのちの 1936 年、コロジュヴァール（ルーマニアのクルジュ＝ナポカ）に生まれた。ルーマニアが社会主義勢力下に入ったのちの 1952 年、学生だったボドルは反政府活動をおこない、2 年間投獄される。釈放後は神学を学び、文書館、印刷・翻訳事務所で働いた（Scheibner）。若いころに牢獄で過ごしたという経験は、のちの人生や文学活動に影響を与えたと自身も述べている（Bodor 2001:143）。

初めて作品を世に送り出したのは 1965 年で、『我々の道』に短編小説を投稿した（『我々の道』は文学をテーマにした週刊誌で、1946 年にコロジュヴァールで創刊、1989 年に廃刊した）。1969 年には初の短編集『証人』を出版するも、政治的な理由から活動を制限され、フリーの作家と

なった。1970年代末になるとトランシルヴァニアで作家として活動することが困難になり、1982年にハンガリーへ移住した（Scheibner）。代表作に『スイニストラの地』（1992年）、『ヴェルホヴィナの鳥たち』（2011年）などがある。

本稿で考察する「夜の駅」は、1977年に『我々の道』に投稿された作品である。その後、1978年に短編集『北の地への到着』が出版されるが、「夜の駅」はこの時にボドル自身の手で加筆・修正が加えられ、『北の地への到着』に収められた。

3. ボドル・アーダームの作風

本章では、ボドル・アーダームの作風について紹介する。それは、端的に述べると以下の5点である。

- 1：舞台は閉ざされた辺境の地に置かれている（Gintli 2011: 984-987）
- 2：物語の背景について明確な記述はないが、東ヨーロッパの社会を彷彿とさせる（Menyhért 2006: 48; Reményi& Tarján 1996: 152）
- 3：作品全体に謎めいた雰囲気漂っている（Menyhért 2006: 48; Reményi& Tarján 1996: 152）
- 4：描かれる空間が作品の主体、主題である
- 5：凝縮された文体で綴られている（Menyhért 2006: 48）

代表作『スイニストラの地』では有刺鉄線や遮断機で閉鎖された空間が描かれているが、ボドルの作品の舞台は、街から離れ、大自然のなかに存在するような、辺境の閉鎖的な土地である。そして、これもまた『スイニストラの地』にも見られる特徴であるが（Gintli 2011: 984-987）、ボドルの作品の主体、主題は、このような空間そのものである。山や川、植物などの自然、雪や雨などの自然現象、建物やモノ、動物、さらに、登場する人々もその構成要素であり、それらすべてが合わさって1つの空間を作り出している。そしてこのような空間の背景、つまり物語

が具体的にいつごろのものであるか、どのような社会を描いたものであるのかという場面設定については、明確な記述がない。だが、描かれる風景を思い浮かべ、人々の言動をつなぎ合わせて、行間から醸し出される雰囲気を読みとると、どことなく東ヨーロッパの、さらには独裁体制下の緊迫した時代を想像することができる。こうした空間の雰囲気、空気感はボドルが重きを置いているもので、彼自身も次のように述べている。以下は彼自身のラジオ・インタビューをまとめた『牢獄のにおい』からの引用である（訳は筆者による）。

「執筆にあたっては、ある場面、何かしらの感情、匂い、何かが動き出す場所があれば十分なのです。もしくは何かしらの雰囲気だけでもいい。前もって書き留めたり固定したりできないもの。このつかみどころのない何か、謎めいたそよ風が作品の魂なのです。」（Bodor 2001: 21）

また、ボドルの作品の舞台が辺境の地に置かれることにも理由があり、それは自身がトランシルヴァニア出身であることにも由来するようだ。以下のボドルの言葉からは、ボドルにとって「辺境」が何を意味するのか、トランシルヴァニアがどのような場所であるのかがわかる。

「辺境の地がわたしの作品でしばしば舞台となるのは、もちろん偶然ではありません。国境地帯や辺境の地というのは、国の中心部と比べると、とにかく刺激的な場所なのです。不思議かつ神秘的で、危険と冒険に満ちた謎めいた場所であり、景色やそこで生じる動きは、それが些細なものであっても緊迫感に満ちています。このような場所は、ヨーロッパの東の方では有刺鉄線や遮断機、堀の上の威圧的な監視塔によって閉じられていました（中略）。国境は容易に越えられるものではなく、普通の人にとっては近寄ることすらためられる場所でした。ですが、国境の近く、もしくは国境地帯に住んでいた人の思考というのは、何か理屈では説明できない意識に定められていたと思うのです。

なぜなら、恣意的に国境が引かれるということは人の住む土地が分断されるということで、そうすると昼夜を問わず、向こう側にある国をのぞくことになるからです。(中略)

国境というのは人々、親戚や知人を引き離し、歴史的に1つであった土地を分断しますが、同時に2つの文化、異なるものの見方が衝突し、互いの内に入り込む、触発と浸透の場にもなります。そんなわけで、わたしの作品の舞台は国境近くの想像上の場所に置かれ、国境地帯の状況の中でわたしは考えをめぐらせることになるのです。というのも、数十年前、わたしが若かりしころは、広く言えばトランシルヴァニア自体も辺境の地であったわけで、わたしが成長し、人生の大部分を過ごし、決定的な体験をしたのは、そのトランシルヴァニアなのですから。」(Bodor 2001:13-15)

本稿で紹介する「夜の駅」においても、上記の作風がよくあらわれている。物語の舞台は初版、修正版、いずれも同じである。冬の駅の、寒く暗い夜の景色が描写されている。雪が積もり、彼方には山々が連なっている。駅には日常的に犬がやってくるようだ。あらわれるのはいつも同じ犬たちで、貨車の後ろへもぐりこみ、転轍機のわきで体を温めると、いつもの道を去っていく。そして駅には木こりと思しき男たちとその家族であろう女たちもやってくる。男たちは斧を携え、出稼ぎだろうか、遠くの森へ列車に乗って出かけていく。これがいつごろの時代の話なのか、人々がどのような状況下に置かれているのかといった記述は見られず、作品全体にとらえどころのない謎めいた雰囲気がある。しかし、あたりに連なる山々やさびれた駅の風景、森へと出稼ぎに行く男たちとそれを見送る家族の姿から構成される空間は、東ヨーロッパの片田舎、辺境の地を想像させるのではないだろうか。

4. 「夜の駅」についての考察

本章では、「夜の駅」の初版と修正版のあいだに見られる相違点を確認

し、そこから読みとることのできるボドルの世界観について述べる。加筆・修正の内容は主に2点ある。まず1点目は物語の終わりが大きく書きかえられていることだ。初版では語り手の回想部分であった最後の2段落が、修正版では飲み屋での男たちの会話と、客の男の帰宅場面に変わっている。そして相違点の2点目は、文章の時制が現在形から過去形へと変わっていることである。本稿では1点目について掘り下げる。

初版の最後の2段落は、語り手が過去のヴィンショー駅を思い出しつつ、当時から変化を見せたであろう現在の姿を想像して綴ったと考えられる部分である。そして最後の一文では、ヴィンショー駅の様子は、冬の夜と夏の昼間ではまったく異なるであろうと述べられている。冬の夜の駅は寒く暗く、村人たちが姿を消すとあっという間に静まりかえる。だが、この最後の一文から想像される夏の昼間の風景は、むしろ明るく活気を帯びたものではないだろうか。

次に修正版に加筆された部分を見る。立ち飲み屋の店主と思しきヴァスィと、木こりと思しき男チェルヴェンスキの会話に加筆されている。チェルヴェンスキがリュックサックに斧を入れているところを見ると、彼も駅に集まったその他大勢の男たちにたがわず、遠くの森に向かうため駅に来たと考えられる。しかしヴァスィとのやりとりからは、森での仕事をやめ、列車にもわざと乗り遅れたということがわかる。これからどうするのかというヴァスィの問いに、チェルヴェンスキは家に帰って寝ると答え、その後、実際にふらふらと帰宅するさまが描かれている。チェルヴェンスキの行動は、その土地の中にとどまり、流れに身を任せる、積極的に行動をおこさないというもので、前向きなものは感じられない。初版では語り手が別の季節・時間帯におけるヴィンショー駅の異なる姿を提示しているのに対し、修正版は終始、寒くて暗い雰囲気でもとめられている。前向きなものをイメージさせる記述はなく、ものごとが停滞しているような、出口のない閉塞感がある。

筆者は、修正版により強くボドルの世界観があらわれていると考えているが、それは初版と比較するとより鮮明になる。2つの版がそれぞれ描き出す空間は共通している。それを構成する要素は、冬の寒い駅の景

色、駅にやってくる犬たち、列車に乗って出かけていく男たちと、それを見送る女たちといったものである。舞台は中心地から遠い片田舎、辺境の地に置かれ、背景の不明瞭さもあいまって、作品全体が暗く、とらえどころのない雰囲気醸し出している。しかし修正版には、そこにさらに別の場面、すなわち立ち飲み屋での店員と客のやりとりの場面と、客の帰宅場面が加えられ、作品の主体となる空間を構成する要素が増えている。これらの場面は、「夜の駅」のメイン、クライマックスとしてのものではなく、作品の空間を構成する一要素である。そしてこの要素は閉鎖性をあらわすものであり、作品全体の雰囲気、空間の描写を補完し、ボドルの世界観をより強くあらわすよう作用していると考ええる。

本稿の執筆にあたり、筆者はボドル・アーダームに「夜の駅」について質問する機会をえた。改稿した理由、修正版の最後に男たちの会話を書き加えた理由について尋ねたところ、『北の地への到着』に収められた一連の作品はすでに発表済みの作品であったが、それらを1冊の短編集にまとめる際には、その短編集全体の雰囲気、内部世界を考慮する必要があったからで、修正版の最後に男たちの会話を加筆したのは、「自分が想像した作品の雰囲気に読者を近づけるため、作品の空気感を少し広げたかったからだ」との回答をえた。つまり、加筆されて加わった閉塞性、閉鎖性というのは、ボドルが目指した世界観に必要な要素であり、また、暗くて寒い辺境の地という空間イメージが重要だったということになる。

『北の地への到着』に収められたその他の作品について、それぞれを初版と比較しつつ考察をおこなえば、ボドルが『北の地への到着』をまとめる際に構築しようとした世界観がより詳細に見えてくることだろう。この点については今後の課題であるが、「夜の駅」の修正版には、ボドルの作品に特徴的なテーマや世界観、作風がより顕著にあらわれていると考える。

5. おわりに

本稿ではトランシルヴァニア出身のハンガリー人作家、ボドル・アー

ダームの作品のひとつである「夜の駅」の初版と修正版を比較し、ボドルの世界観、作風について考察した。ボドルの短編小説、および短編小説集一般について研究をおこない、『北の地への到着』所収の各作品を精査することが今後の課題となるが、本稿ではこれまで邦訳のなかったボドルの作品の作風、世界観を具体的に提示できたと考えている。

なお、最後になるが、『北の地への到着』所収の「夜の駅」については、10名のトランシルヴァニアの作家がそれぞれ自由に続きを書きしており、それが『夜の駅』（コイノーニア、2011年）としてまとめられている。ボドルの作品は、その謎めいた魅力ゆえに人々の想像力をかきたてている。

参考文献

- 奥彩子、西成彦、沼野充義（2016）『東欧の想像力 現代東欧文学ガイド』松籟社。
- Bodor, Ádám (2001) *A börtön szaga: Válaszok Balla Zsófia kérdéseire: Egy korábbi rádióinterjú változata*. Budapest: Megvető.
- Dávid, Gyula (szerk.) *Romániai magyar irodalmi lexikon: Online*. Kriterion Könyvkiadó. (<https://lexikon.kriterion.ro/szavak/4880/>)
- Gintli, Tibor (szerk.) (2011) *Magyar irodalom*. Martonvásár: Akadémiai Kiadó.
- Menyhért, Anna (szerk.) (2006) *Kortárs irodalmi olvasókönyv: Szemelvények, íróportrék, bibliográfia*. Budapest: Anonymus Kiadó, Balassi Bálint Magyar Kulturális Intézet.
- Reményi, József Tamás& Tarján, Tamás (1996) *Magyar irodalom 1945-1995: Műelemzések*. Hungary: Corvina.
- Scheibner, Tamás. *Életrajz*. In: Petőfi Irodalmi Múzeum, Digitális Irodalmi Akadémia. (<https://pim.hu/hu/dia/dia-tagjai/bodor-adam#eletrajz>)